〔書　評〕

大野　晋著『係り結びの研究』

青木伶子

本書は、「係り結びの本質とその構造を明らかにしよう」（序章3頁）としたものである。それは、著者が文法を学び始めて以来、問ひ続け考へ続けてきた問題であり、それに対する回答は、著者積年の研究の結晶であるだけに、極めて重いものがある。

係助詞とは、「日本語の文の構成法の基本的部分にかかわる役目を負うもの」でありその働きによって二類に分れる。一つは「題目・対象の提示」を本来の任務とするもの、ハ・モ・コソ・（シ）。他の一つは、本来「文末の陳述の変容」を任務としたがそれが倒置によって文中に入り、強調の形式を作ったもの、ゾ・ナム（ナモ）・ヤ・カである。又、それらの助詞が如何なる語を承けるかという内部的観点から見るならば、疑問詞を承けるものモ・シ・ゾ・カと、承けないものハ・コソ・ナム（ナモ）・ヤという二系列となる（以上339～340頁の引用或いは要約）。

これが著者の回答、即ち結論である。コソの係り結びについて著者は、一九五五年末から足掛け三年にわたって詳細な研究を連載の形で次々と発表した[注1]。また、右結論の、最も重要な骨子である、二系列・二類の区別に関しても、十年以上も前に論文の形で世に問はれてをり、その当時から私は、目を見張る思ひを以て接してきた。それが今回、体系的に纏められたのである。

第一章で係り助詞が二系列・二類の区別をもつものであり、この観点なしに係り結びを理解することは出来ない、と説き、第二章から第五章において、それぞれ異系列に属しつつ対を成す助詞、ハとモ、コソと（シ）、ナム（ナモ）とゾ、ヤとカを取り上げてその差を説く。終章では、このやうな二系列対立の構造を有した係り結びが亡びた後、これに支へられてゐた日本語の表現はどうなったのかを問ひ、係り結びの消失とほぼ時を同じうして、ハとガの対立といふ別の機構が現れて、係り結びの内部の構造的な対立の一部を継承したのだとする。

係り助詞が、対立的二系列（疑問詞を承けるか承けないかによる）と、上下二類（主部形成か述語部形成かによる）とによって成り立ってゐるとの指摘、および、係り結びの消失によって疑問詞を承ける系列の語が姿を消した後を、格助詞ガが継いでゐるとする考へが、本書において著者が最も力を入れて説いたところであり、読者にとっても極めて重要な点と思はれる。

先ず二系列の問題から取り上げる。個々の係助詞について、疑問詞を承けるか否かの点を指摘したものとしては、著者も言ふやうに

近世のてにをは研究書（あゆひ抄）があるけれども、係助詞の体系的構造としてこの対立を指摘したのは著者の新視点である。而もこの対立が、日本語の構文法の重要な特性として、係助詞の消失した現代にまで受け継がれてをり、それがハとガであるとの、もう一つの重要な指摘をも導いてゐる。筆者も現代語におけるハとガの対立が、著者の言ふ如く、

既知・確定・一般的題目としての提示
未知・不確定・新しい発見としての描写・記述（38頁）

といふ対立であるのみならず、ハは題目―解説より成る分節文としての題述文を形成するのに対し、ガは、述語成分が他の成分を包み込んでしまふ構造であるが故に、結局は単一成分から成ると言ひ得るところの、格述文を形成するものであり、両者は決して相容れないといふ重要な対立をも認めるので、この指摘を極めて意義深いものと考へる。ただし、古典語における係助詞の二系列に関して、

Aハ・コソ・ナム・ヤ――既知あるいは確定あるいは確実あるいは断言あるいは旧情報にかかわる
Bモ・ゾ・カ――未知あるいは不確定あるいは不確実あるいは否定あるいは推量あるいは新情報にかかわる（37頁）

と言ひ切ってしまってよいかどうかには、些かの疑念がある。何故ならば、現代語のコソが主語に下接した場合には、コソハ・コソガの形において屢々実現するし、コソ単独の場合にもコソハの意味だけでなく、次例の如くコソガの意味と解すべきものがあるからである。

・「これは貧者の信心こそ仏の意志にかなうという意味らしいが、じつはまったくのたばかりだ」（山本周五郎『赤ひげ診療譚』新潮文庫本231頁）

・動物から遠ざかることこそ人間らしさだったはずが、動物に近づくことが人間の開放になるという思い込みを信じつつある。（朝日新聞昭和55年8月12日夕刊　3面「戦後その精神風景〈2〉からだ」富岡多恵子）

とすれば、古典語の場合にも、コソガの意味と解釈される例が存するのではないかと思はれる。次に示すのがその例である。

・睢鳩居る渚に居る船の夕汐を待つらむよりは吾社益（『万葉集』十一　二八三一）
・花よりもひとこそあだになりにけれいづれをさきに恋ひんとか見し（『伊勢物語』一〇九段）
・もののあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、（『徒然草』一九段）

コソガの意味として解されるといふことは、コソの上接語が既知ではなく、未知扱ひされてゐることを意味する。ナムにも同様のことがある。

・そこなるをんな、きゃうひとをばめづらかにやおもひけん、せちにおもへる心なんありける（『伊勢物語』一四段）

この場合、ナンは、題目たる「そこなるをんな」に対する述部内においての主語を承けてをり、…ノ心ガアッタ　といふものである。即ち、述語句全体が未知である。ヤに関しても、

・面形の忘るとならばあづきなく男士物屋恋乍将居（『万葉集』十一　三五八〇）
・梓弓引きてゆるさぬ大夫哉恋といふものを忍びかねてむ（同十二　二九八七）
・このころは千歳や往きも過ぎぬると吾哉然念見まくほりか

も（同四　六八六）

・琴取れば嘆き先立つ蓋しくも琴の下樋に嬬哉匿有（同七　一一二九）

第一例を除く三例はヤに関して確実表記ではないけれども、校本万葉集その他によっても、カと訓む説はないやうである。等の如き例が見られる。嘗ての氏の、日本語の文表現は既知と未知といふ二つの要素の組合せによって四つの型から成り立ってゐる（『日本語の文法を考える』一九七八年　岩波新書）との指摘を極めて卓れたものと見たが[注2]、その観点からしても、右の如き点が問題として浮び上がってくるのである。やはり、疑問詞を承けない系列のものがすべて既知・旧情報等にかかはると言ひ切るのは難しいやうである。勿論、コソの場合と、ナム・ヤの場合とでは、本来主部にあって題目の提示に働いたものと、本来述部にあって陳述の変容として働いたものとの違ひがあるとすれば、両者を全く同列には扱へないであらうが、それなりに、それぞれの説明があってほしいと思はれる。

本書におけるユニークな指摘の一つに「再審」といふ考へがある。

人多に満ちてはあれども（『万葉集』五　八九四）

如己男に負けてはあらじと（同九　一八〇九）

のやうなテハの場合、ハの下が「あれども」「あらじと」のやうに逆接または否定になることが少なくないのは何故かの解釈として現れる。現代語でも「……ではない」のように、「では」の下は否定になることが多いのと同じである。ハは題目提示の助詞であるから、その上に来る叙述をテによって「タシカニ……デアッテ」と確認しておきながらその判断をハで承けるとは、判断そのものの可否を再び問題とすることである。これは以前の決定を覆すことになる。譬えば最高裁判所が再審の決定を下すようなものである。それ以前の裁判で死刑であったものも「再審」となると無罪になる。それ以前の死刑という決定を再び問題にするとは、それ以前の判断を否定しているわけである。だから結果は無罪となる。それとこのテハ、デハとは本質的に同じである。（72〜73頁）

これは確かに興味深い考へである。しかし私がこの説に無条件には従へないのは、氏の言はれる「判断」が如何なるものなのかが明らかでないところにある。他の箇所で何度か使はれてゐる「陳述」とも極めて近いと思はれるけれでも、厳密には不明である。一般に「判断」と同じとも違ふともされる「断定」との関係も明確であることが望ましい。テハの場合、「タシカニ…デアッテ」と確認しておきながらその判断をハで承けてゐるとされるが、「タシカニ……デアッテ」の意味に相当するのは「テアリ」であって、「テ」のみには未だ判断はないと私は考へるからである（私としては、判断は陳述の一部であり、活用語終止形の無形部分φ、及び不変化助動詞がこれを担ふと考へてゐる）。とはいへ、これはこれで一つの優れた解釈であると思はれる。が、又、ハが付加したが為に下が否定とならざるを得ないのだとする大野氏の視点とは逆に、否定表現の方が意味的にハを要求してゐるのだ、というやうな解釈があってもよいのではなからうか。[注3]

なほ、逆接条件形式は、対比表現の典型的なものであるから、基本的に対比性をもつハがこれに用ゐられ易いのは当然のことである。即ち、やはりこれも、ハがあるから逆接になるのではなく、ハがなくとも充分に成り立つ逆接条件表現の、後句との対比性をより一層明確ならしめるために、ハが用ゐられたのだと私は解釈したいのである。

二系列の問題に関連して極めて注目されるのは、シがコソと対をなす係助詞なのではないか、との指摘である。係助詞が二系列を成してゐるとの認識があって始めて、コソの対となるべきものの欠落に気づき得たわけである。コソが「逆接」の前提条件句を作るのに対し、シが「順接」の条件句を作る等の点に、対照的な性格を認めてのことである。

この新説に対して誰しも抱くであらうと思はれる疑問――シが一定の活用形と呼応しないに拘らず係助詞と認めてよいか――に対しては次のやうな回答が用意されてゐる。

係助詞とは単に、文末が終止・連体・已然・で終わるための助詞ではない（38頁）。用言の活用形との呼応という点だけから係り結びを規定すると、シの下には特定の活用形だけが来るわけではないから、シを係助詞と扱うことは不可能であるが、しかしシの下に来る意味・用法は、順接、自然的成立、自然的感情であり、これら三つには自然の成り行きをそのまま受け入れ、受け取って表わすという意味上の本質的な共通点がある。これはコソがその下に逆接既定条件句を要求するのとは全く対照的である。したがってもし係助詞を機能だけによって把握するならば、シはコソの相手としてその欠落を埋めるだろう（43頁）。

氏における「意味」と「機能」との関係がもう少し懇切に説かれるならば、より分り易かったのではないかと思はれる。

また、シは疑問詞を承ける系列であるから、氏によれば、先にも述べたやうに、Bの、

未知あるいは不確定あるいは不確実あるいは否定あるいは推量あるいは新情報にかかわる（37頁）

と捉へることにならうが、

・ 毎年に梅は咲けどもうつせみの世人吾羊蹄春なかりけり（『万葉集』十 一八五七）

＊原文「君」であるが、「吾」の誤とする諸説に従ふ。

・ 夕さらず河蝦鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞師良しも（同十 二二二二）

・ なかなかに死なば安けむ出づる日の入る別知らぬ吾四苦しも（同十二 二九四十）

これらの例では既知、旧情報にかかはってゐる。即ち、先に述べた、係助詞の二系列をABとして画然と分けてしまふことへの疑念は、疑問詞を承ける方の系列に関しても同様に提出されるのである。

次に二類の別について。先にも引用したやうに、著者は係助詞を、文のどの部分で働くかによって「本来は文の主部に来て、文の題目あるいは条件を提示し、あるいは強調する」（41頁）のを役目としたハ・モ・コソ・（シ）と、本来「述部にあって陳述の変容を示」すゾ・ナム・ヤ・カ（26頁）との上下二類に分った。これも著者によって初めて指摘された、重要な観点である。名詞述語文を例に、主部と述部の倒置として説いた部分は納得し易いが、連用修飾成分に下接する場合に関しては、全面的に賛し得るわけではない。即ち「今日そわが来し」は「わが来しは今日そ」の倒置だ（199頁）とするが、両者は表現内容として決して等価ではないし、「寄生木取りて挿頭しつらくは千年寿くとそ」（万葉 四一三六）の如き例があることを理由に「束ね治めむ表となも此の帯を賜はく」（45詔）の場合にも「帯を賜はく（ハ）束ね治めむ表となも」の倒置とする（236頁）が、著者が起源的とする論理的な表現の方が先行してゐたとする考へにも直

ちには即きにくい。

又、ゾは「倒置によって文中に入って、次のように題目を強調する用法を展開した」(342頁)とある。ここにおいて、先に述べた、二系列に関する疑問点とも連なる問題が浮かび上って来る。それは、未知のものが題目になり得るのかと言ふ点である。一般に題目とは既知あるいは既知扱ひのものとの認識があるから、この扱ひには戸惑はざるを得ない。その間の事情について説明が必要である。

終章の二では「係り結びはいかにして亡びたか」について次の如く明快に述べる。

一　積極性において劣る助詞から消えて行った。

二　古典語の助詞・助動詞は、一単語で多くの複合した意味を担ってゐた。が、「混沌→分解」といふ近代語化の傾向により、副詞を別に加へて表現するに至った。これが係り助詞の弱体化・衰亡の一因である。

複数の意味を担ってゐた一単語が、副詞や下接辞との共同による表現として分化してゆくとの見解は、嘗ての山口明穂氏の指摘[注4]、最近の阪倉篤義氏の指摘[注5]とも軌を一にするものであり、古代語から近代語への流れの特質を言ひ得たものである。

三　日本語は、文末で陳述を決定する言語である。従って、文中に陳述の助詞を持ちこむのは原則違反であって、やがては しりぞけられる。　(以上終章二の要約)

終章の三では「係り結びの亡びた後はどうなったか」を問うてゐるが、これに対する回答も、著者にとっての、従って本書においての最も重要な指摘の一つである。

「日本語の文には、実は基本的に二つの型がある。一つは、あらかじめ題目語あるいは条件を立てて、それについての説明をその下に加えるという型である。いま一つは、前もって題目を設定することなしに、生起する現象をいきなり描写し、記述するという型である」(336頁)。係り結びが生きてゐた古典の世界では、係り助詞の、疑問詞を承けるか承けないかによって対立する二系列がこれを分担してゐた。係り結びの崩壊した後、この対立の構造はどうなったかと言へば、疑問詞を承ける方の席にガが坐った。即ち、現代語のガとハの対立は、古典語の「係り結びの内部の構造的な対立の一部を継承するもの」(354頁)なのだ、といふものである。360頁では、ガとゾとの近さを説き、また、「係り結びの体系の全体的な亡びの流れの中で、係助詞ゾが衰弱して使われにくくなったときに、主格のゾの代りに、広くガが使われるようになっていった」(361頁)とも述べてゐる。これを、古典語ゾにそのまま代るものとして現代語ガがその席に坐ったのだ、と説いてゐると早合点すべきではない。何となれば、既に引用したやうに、ハとガとの対立は「係り結びの内部の構造的な対立の一部を継承するもの」としてゐるからである。

二系列の対立に関しては、助詞ゼロに対する視点も必要かと思はれる。

ともかく、日本語における重要な、構文上の根本的性格を指摘したこと、而も、それを古典語の世界において支へてゐた係り結びが崩壊すれば、別の機構が代ってこれを支へてゐるといふ事実からも分るやうに、この対立の機構は時代を越えて連綿と保たれて来た重要なものであると指摘したことは、本書の価値を定めるものである。

最後に、私がどうしても賛成し難い点を一つ挙げる。「命題を表現する文の主格を示すハ」(61頁)・「係助詞とは、本来格にかかわるこ

となく使われ、格の表示をも兼ねている」（217頁　傍線筆者）のやうな記述が所々に見られるが、主格をもつ文と題目をもつ文とは、その構造を全く異にしてをり、題目を示すハが格表示をも兼ねるといふことはないと私は考へてゐる。[注6] 主述構文における主格は屢々説かれてもゐるやうに、述語に従属するものであるから、結局は述語といふ一成分に収斂されるものである。一方題述文における題目は、飽くまでも述語と対等であって、決して述語に収斂されたりしない。両者はその構造を全く異にしてゐるのである。著者は、係助詞の二系列の対立、およびハとガとの対立を常に「日本語における重要な、構文上の根本的な対立」と捉へてをられるが、根本的に異なる構文を担ふ語が、他方の役をも兼ねる等といふことはあり得ないのではなからうか。ハが格表示をも兼ねてゐるやうに見えるのは、ハの上接語と下の述語動詞とが、仁田義雄氏の言はれる〈意味特性の原則〉[注7]に支配されてゐるからに他ならないのである。

次は、欲の深い願ひを二つ。その一。疑問詞を承ける系列にあって、モのみは疑問詞に下接しても決して疑問の意とならない。疑問詞には(1)疑問点を表す用法、(2)助詞カ・ヤラを伴って不定を表す用法、(3)助詞モ・デモを伴って全称を表す用法等がある（『国語学大辞典』要約）ことは周知のことであるから、そのこと自体は何ら問題ないし、著者自身35・36頁において更に詳しく八用法を立てて論じ、又、85頁では疑問詞を承けたハについて「不特定の意」であるとし、その事実は充分に指摘されてゐるのであるが、このやうな疑問詞を承けたモも係り機能をもつ係助詞であるのか、この点に関する言及が望まれるのである。

その二。非常に優れた著書であるだけに、用語索引のないことが痛切に惜しまれる。本書は単に熟読するのみでなく、今後も何かにつけて参考にし、引用もしたいのである。

浅学非才をも顧みず種々の言辞を列ねたが、最も惧れるのは、私の理解不足による見当違ひがあるのではないかといふ点である。また、カと対比して新たに説かれたヤの用法など、称揚すべき多くの点について触れ得なかったことも申し訳なく思ふ。御海容を請ふものである。

注1　「日本古典文法――その一・コソの係り結び(一)～(十)」『国文学解釈と鑑賞』二〇-一二～二二-三）

注2　部分的には修正の要も指摘されてゐる。即ち、ハが常に既知を承けるとは限らない（尾上圭介「提題論の遺産」『言語』六-六・「『は』の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』五八-五）

「既知＋既知」の型は大野説よりも狭く認定すべきである（北原保雄『日本語の世界6』一九八一年　中央公論社）

「既知＋既知」の型と認むべきものは結局ないのではないか（青木伶子　『現代語助詞「は」の構文論的研究』一九九二年　笠間書院）

注3　注2の拙著第七章

注4　『中世国語における文語の研究』一九七六年　明治書院

注5　『日本語表現の流れ』岩波セミナーブックス45　一九九三年二月　岩波書店

注6　拙著117・132頁

注7　『語彙論的統語論』92頁　一九八〇年　明治書院

（一九九三年一月十二日発行　岩波書店刊　A5判　四〇〇頁　定価四八〇〇円）

――成蹊大学教授――

（平成六年五月十一日　受理）